



国際親善ニュース

第 10 号

昭和59年3月31日発行
金沢市都市提携委員会
事務局：金沢市総務部総務課
国際親善係 TEL 20-2075

交流の活発化を確認 —江川市長バファロ訪問—



(写真は市長室での記念撮影。右からグリフィン市長、江川市長、シュミッツ下院議員、クーパー姉妹都市委員会責任者)

江川市長と油屋市商工観光課長が姉妹都市提携20周年を記念して昨年9月1日から2日まで姉妹都市バファロ市を訪問した。バファロ空港にはグリフィン市長ほか多数の関係者が一行を出迎えた。そのままロータリークラブを訪問し、金沢・バファロ姉妹都市委員会の会員等約200名から歓迎を受けた。続いてバファロ市役所を表敬訪問したが、シュミッツ下院議員も同席し、グリフィン市長となごやかに歓談し、両市トップの友情を深めた。この後、市内のデラウェア公園で一行のために歓迎セレモニーが開かれ、関係者約80人が列席し、両市長が高さ約2mの桜の苗木5本を記念植樹した。この公園の池には小島があり、そこに金沢から以前に贈ったことじ灯籠(石製のが壊されたため鉄製のものに替わっている)が設置されており、又、たいこ橋もかけられており、ちょっとした日本式庭園が造られている。

1日の夕方、エリー郡歴史博物館において一行のための歓迎レセプションが盛大に催され、シュミッツ下院議員、ラトコウスキー・エリー郡政府議会議長、カーランド金沢・バファロ姉妹都市委員会会長代理等約80名が出席し、久しぶりの金沢からの市長訪問とあって、レセプション会場は、歓迎一色に包まれた。会場には在バファロ日本人会の方々も多数参加しており、江川市長は、やや停滞ざみであった両姉妹都市間の交流がこれを機会に活発化することを力説し、盛大な拍手を浴びた。

翌2日は、ニューヨーク州立大学バファロ校を訪問し、大学関係者との親善交流を深めた。同校のサンプル学長は、同年8月に金沢を訪問しており、江川市長との再会を喜び、バファロ校キャンパス内を熱心に案内した。その日の夕方、日本人教授陣約40名をも交えて、サンプル学長主催のレセプションが開かれ、大学間レベルでの今後の交流が話し合われた。

市長一行は、バファロ滞在中、両市間の友好・親善を大いに深め、又、今後の活発な交流を約束してバファロを離れた。

強まる友好の絆



蘇州から中国医学考察団が来訪

姉妹都市蘇州市から中国医学考察団一行5名（団長、蔡景高蘇州市中医病院副院長）が昨年10月14日から22日まで金沢を訪問した。本市滞在中、金沢大学医学部、県立中央病院、がん研究所等を視察し成果を挙げた。又、東洋医学臨床研究所の協力のもと、日中医学合同研究発表会が開かれ、同研究所の医師らと漢方薬の投与や鍼灸などについて熱心な討論を行い、初の医学交流は、大きな成功を収めた。

又、一行は医学分野だけでなく、一般市民との友好をも深め金沢を発った。

（写真左は、市長に掛軸を贈る蔡団長）

イルクーツク市に「金沢市歌」流れる

昨年7月9日、10日両日、バロフスク市で第9回日ソ沿岸市長会議が開かれ、これに出席した江川市長は、この後姉妹都市イルクーツク市を訪問し、先に同市入りしていた亀井企業局次長、江上市立病院総婦長と合流した。11日午後5時、白夜の空にシベリアポプラの白い花がボタン雪のように舞う中、金沢通りの開通式が行われた。沿道には千名余の市民が両国旗と金沢市の小旗を振り飾り、金沢市歌が流れ、シクロバト・江川両市長がテープカットし、両市の永遠の友情を誓った。滞在中、バイカル湖、ピオネールキャンプ等を訪問し友好を温めた。

（写真右は、金沢通りの記念プレートの前で。）



宝生流能楽がナンシー世界演劇祭に参加

金沢市姉妹都市親善使節団一行25名（団長、尾戸市助役）と加賀宝生世界演劇祭公演団一行80名（団長、嵯峨金沢能楽会会長）が昨年5月25日から28日までナンシー世界演劇祭参加と親善を兼ねて姉妹都市ナンシー市を訪問した。金沢能楽会は、宝生流能4番と狂言2番の演目で幽玄の世界をナンシー市民に披露し観客を魅了した。公演は、連日満員の盛況で長雨による洪水の被害の暗いニュースに包まれていただけにナンシー市民は、姉妹都市金沢からの一行訪問と伝統芸能の公演に接し、久し振りに明かるさを取りもどしたようであった。一行は、両市の親善の大役を見事に果たしナンシーを離れた。

（写真左は、ナンシー駅前での出迎えを受ける一行）





州立大学バファロ校学長夫妻一行が来訪

姉妹都市バファロ市からニューヨーク州立大学バファロ校学長S・サンプル夫妻、J・カーター同校基金財団事務局長、同校日本語科主任道井孝子助教授の4名が8月11日から12日まで金沢を訪問した。一行は、バファロ校内に日本に関する総合情報センター的なジャパン・センターを設けるため日本政府と経済界に協力要請をしようと来日した機会に金沢へ立ち寄ったもので、滞在中、市長表敬、商工会議所、金沢大学などを訪れ、大学では外国人留学生を交え金沢での学生生活などについてなごやかに懇談し、両大学間の交流を深めた。
(写真左は、市長表敬をするサンプル学長夫妻一行)

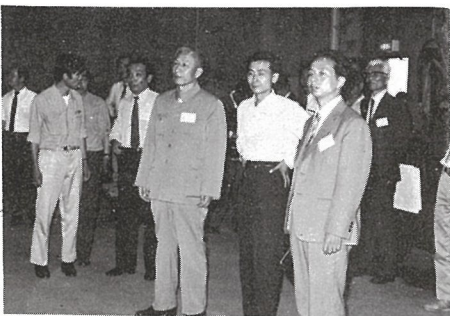
アントワープ市の画家が絵を寄贈

姉妹都市アントワープ市の王立アカデミー学校で油絵を教えるE・フェルハル夫妻が9月11日から13日まで金沢を訪れた。同氏は、ベルギーの中堅作家として有名で、東京のストライプ美術館で個展を開いたついでに本市を訪れたもの。市長表敬の際、自作の絵を寄贈した。作品の題名は「黄色の空間」で6号キャンバスを横に2枚並べ、その中間に彫刻を施した板がはめ込まれている珍しい作品で、本市では金沢美術工芸大学に飾っておくことにした。同夫妻は、滞在中、市内の神社、仏閣など古い文化に興味を示し、13日夕方、金沢を離れた。
(写真右は、兼六園を見学中のE・フェルハル夫妻)



蘇州から都市建設視察団が来訪

姉妹都市蘇州市から蘇州市都市建設視察団一行5名(団長、秦文芸蘇州市人民政府副秘書長)が6月30日から7月5日まで金沢を訪れた。一行の目的は、本市の都市開発の現況を学ぶことで、土木、都市建設、生活環境の各部、企業局等の職員から説明を受けたり、現場視察などを精力的に行い成果を挙げた。市長表敬の際、蘇州の伝統的技法により数ヶ月を要して作られたという版画の掛軸が秦団長から市長に手渡された。両市ともそれぞれ高い水準の伝統工芸を有すこともあって、市長と話がはずんだ。
(写真左は、西部清掃工場を視察中の一行)



フランダース先端技術産業見本市に出展参加

姉妹都市アントワープ市でフランダース先端技術産業見本市が5月3日から5日間、盛大に開かれ、本県内の先端技術企業7社がパネル展示の形で参加し、説明員として7社の代表者1人と市観光課職員1人が現地でPRのため派遣された。参加企業は、津田駒工業、石川製作所、高松機械工業、渋谷工業、北商、共和電機工業、中村留精密工業の各社で、それぞれの最新製品をパネルで紹介した。又、金沢市も市紹介パネルを出展した。同見本市開会式に渋谷工業社長渋谷亮治氏と小池喬市経済部長が出席し、ボードワン国王殿下に謁見する名誉を持った。
(写真右は、会場に設けられた金沢のコーナー)



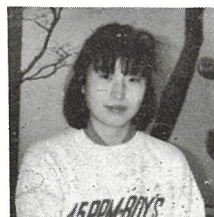
末岡氏が本会会長に就任



6月15日に金沢市都市提携委員会総会が開催され、吉田前会長に替って新会長に末岡尚市議会議長が選出され、就任した。末岡新会長は「姉妹都市間の市民相互の理解と友好を一層深めて行きたい」と力強くその抱負を語った。

総会ではこのほか前年度決算報告が承認され、又、58年度の予算案(総額7,249千円)、事業計画案が可決された。

ナンシー派遣留学生決定



姉妹都市ナンシー市との交換留学生制度に基づき第6回ナンシー派遣留学生を募集したところ13名の応募者があり、書類選考、面接選考の結果、中森あかねさん(金沢美術工芸大学美術科油絵専攻4年)に決定した。中森さんは9月に出発したがその前に挨拶に来庁し「勉強は勿論のことと市民外交をも立派に果たしたい」と元気に語った。

世界演劇祭に参加して

金沢能楽会会長 嵯峨逸平



1983年5月下旬から6月上旬にかけて金沢市をはじめ外務省、石川県など関係各位のご協力で、フランスのナンシー市で開催された世界演劇祭ならびにデンマークのコペンハーゲン市日本芸術祭に公演団の団長として出席いたしました。

今回の公演団は、金沢能楽会の佐野正治先生はじめ多数の職分の方の参加をいただいて組織されたものでございます。またナンシー市は金沢市の姉妹都市でありますので、姉妹都市友好訪問団も同時に組織され、金沢市の尾戸嘉博助役も団長としてご同行をいただきました。

ナンシー市では、日本の伝統芸能である加賀宝生能を披露いたすことができましたこと、また姉妹都市交流の一役を担える機会を得ましたことは、金沢市民である私達にとって誠に心嬉しい限りでございました。ナンシー市には5月25日到着。ブルーゼ・ジュルバン助役と世界演劇祭のデュブレ理事長の出迎えをいただき、その後市役所にジュルバン助役を表敬訪問しましたが、ナンシー市は折からの長雨で洪水にみまわれている最中にもかかわらず、広間で開催されたレセプションは大変心暖まるものでした。

ナンシー世界演劇祭は、世界各地で開催されている演劇祭の中で最も由緒ある、言わば「草分け」的な存在であり、4年に一度世界各国からさまざまな劇団がナンシーの地に集うのであります。私たちの参加した1983年演劇祭は「東と西の対話」を統一テーマとし、20数カ国からの劇団の参加がございました。インドの古典舞踊ヤクシャガーナ、ブラジルの人形劇、イギリスのシェークスピア劇からフランスの前衛劇まで実に幅広く種々の劇団、演劇の「るつぼ」として位置付けられるのではないかと思います。私たちの公演団は、能「羽衣」狂言「棒しばり」など二日間にわたり演じましたが、1,300席のボワレルホールは、両日にわたり超満員の状況で、しかも観客層は実に若いのです。青い目の若者が咳払い一つせず観能している姿は、能の世界に違和感なく同一化しているばかりでなく、そこから何かを感じ取ろうという熱い視線を感じさせました。日本の中世より600年余りの年月にさらされて現在の姿に至りなお脈々と受け継がれている加賀宝生能が、世界演劇祭という国際的の舞台で、すぐれて今日的な生命を持ち続けていることを感じさせる、手ごたえのある瞬間でした。

欧州は、どの国でも演劇に対する長い伝統と深い愛着を持っています。そのような環境の中でしっかりと根をはっているナンシー世界演劇祭で初めて演じられる「能」を、私たちが披露できたことに大きな喜びを今更に感じる次第です。またコペンハーゲン市日本芸術祭における演能も、在デンマーク日本大使はじめ大使館の方々のご協力によって大成功のうちに終ることができました。

貿易問題を中心に国際間の経済摩擦が話題となる昨今、文化交流の果すべき役割はいよいよ大きくなって行くものと思います。これからも金沢市民憲章の精神を体し国際親善、文化交流の発展に努めてまいります所存でございます。



プロフィール

デニス・ロイ・ホーナーさん (37歳)

金沢大学と州立大学パファ口校とは姉妹大学であり、医学部学生を主体に学生間の交流が行われてきたが、教師の派遣交流は初めてで、ホーナーさんは自ら志願し、金沢大学教師として赴任。現在、1週間に3回程、文学部ほか2学部の英語会話の

授業を受け持っており、各学部の沢山の生徒と話をする機会があり、それだけに日本の学生の考え方をよく知っている。「日本の学生は大人という感じがしない。アメリカの学生は自分の考え方を持っており、新しいものに取り組むまじめさがある」と語る。又、日本の英語教育について「ペーパー試験のための英語教育では生きた英語は身につかない。これからの国際化時代は会話を主体とした教育が必要」と金沢での5年間の教師生活を通して語る言葉には重みがある。最近、文部省が外国人に対しても教授の門を解放したが「外部からの新しい刺激によって学問の活性化、創造性が生まれ、そのことがより深い研究姿勢につながる」と大いに賛同。最後に国際交流で大切なことを尋ねると「カメラ、コンピューターなどは広く知れ渡っているが、もっと日本の素晴らしい文化や戦争を通して培った日本人の平和的精神といったものを広く世界に理解してもらうことが大切」と語る。数年前、奥さんを不運な交通事故で亡くされるという不幸にもめげず、北陸の地、金沢で暮らすホーナーさんである。パファ口出身。あごひげのよく似合う、やさしそうなアメリカ人である。市内石引在住。

編集後記

昭和58年度も沢山の国際交流があり、大変忙しい毎日でした。そのうちの幾つかは紙面の関係で掲載できず残念です。

今回からは、なるべく読み易く、又、見やすくするため写真のスペースを大きくとり、又、文字も大きくしました。御感想をお寄せいただければうれしく思います。